

研究ノート：台湾の日本語教育

磯田 一雄

1. はじめに——台湾の植民地教育は「成功」だったのか

筆者は1990年3月25日から4月4日まで、「教科書研究会」の会員である野村章（故人）・駒込武（現・お茶の水女子大）の両氏と、日本の植民地時代の台湾（以下植民地の表記は原則として引用符を省略）における日本語教育を中心とした「皇民化教育」の実態について調査を行った。これに関しては既に『成城学園教育研究所研究年報・第十四集』（1991年12月）において共同報告を行い、『アジア文化』第17号（アジア文化総合研究所、1992年）で印象的な報告「台湾の皇民教育の事跡を尋ねて」を書いている。今回はその補足的な報告を当時の研究会での討議などをも含めて行うことにする。台湾は日本語のもっともよく通ずる外国として知られてきた。このとは我々の調査でも十分確かめられたように思っていたが、最近訪台された天理大学の前田均助教授（言語学）によれば、台北でもすっかり日本語が通じなくなっており、聞きとり等を急ぐ必要があることを痛感されたということである。5年前の調査を改めて記録しておくことも、その点では多少意味があるかもしれない。

この調査でまず印象に残ったのは、聞き取りをお願いしたどの人も極めて親切で協力的であったこと、むしろ過去のことを聞かしてもらえることがとても嬉しいという感じだったことである。大体数人のグループで聞き取りをすることが多かったので、相互作用がうまく働いてみんな争って次々と本音を語ってくれるような状態になることがよくあった。先住少数民族の人々を含めて、植民地時代の教育をそんな悪くは思っていないというよりも、むしろ肯定的に受け止めてくれているような感じさえさせられたことも多かった。

同じ植民地でも朝鮮の場合日本の植民地教育は、民族の主権と魂を奪おうとする非人間的なものとして、極めて批判的に受け止められている。筆者の経験では韓国だとこういう聞き取りをすること自体が容易ではない。ところが台湾

の場合日本語を「押し付けた」ことも、時には「体罰」でさえも一般にそれほど悪いことのように思われていないかのようなのである。またこれはあくまで中国大陸志向の国民党の政策による台湾史警視の結果なのだが、旧植民地・占領地の教育書の中で台湾だけは植民地時代の日本の批判をする記述がほとんどないのである。だがこれは領台当時から20年近くにもわたって延々と続いた反日抗争や、その後の自治要求運動などから目をそらしてよい理由にはならない。

台湾は日本の旧植民地経営の中では「成功」だったと言われることがある。¹⁾しかしこと教育に関する限りPatricia Tsurumiが日本の台湾統治を朝鮮と比較してその特徴を詳細に分析しているのに見られるように、両者の植民地化を単純に「成功」、「失敗」などと言えるものではない。²⁾このことは我々の調査の中でも次第に明らかになってきた。いずれにせよ植民地相互間の比較が、今後の日本語教育研究においても多くの示唆を与えてくれることだけは間違いないと思われる。

当時「教科書研究会」では満洲・朝鮮・インドネシアなどでの植民地・占領地教育の研究を既に数年間にわたって行ってきたのだが、台湾はそれまであまり研究されていなかった。教科書なども台湾は日本の領有した時期が51年間と一番長いのに、当時はまだ資料調査のネットワークが不備で、³⁾台湾で使われた教科書が利用しにくかったこともその一因であった。この調査旅行にして以前から予定していたわけではなく、始めは1989年の夏に中国東北（旧・満洲）を訪問する予定でいたのが、例の「天安門事件」で急に中止となったため、実はその代行として行われたのである。

2. 調査の概要

この調査で訪問したのは、西海岸では台北・台中・台南・高雄の各都市と、台中の近くにある草屯という田舎町、それに東海岸では台東郊外の卑南郷である。山地と最南端を除きほぼ台湾全土を巡ってきたわけで、夜行列車1泊を含む計10泊11日の旅にしては要領良く、能率的・効果的に回れたものと自負している。これには「教科書研究会」会員で台南出身の黄振原氏（現・立命館大学

大学院)の協力が大きかった。

3月25日：台北(中正)国際空港着。黄氏友人呉翰祺氏の出迎えを受け台北市の南郊新店の自宅に案内され27日まで3泊させていただく。

26日呉氏の車で台北市内の訪問予定先を回ってもらう。これは誠に強力な援軍であった。この日台湾の日本語教育研究の第一人者である蔡茂豊教授(東呉大学)ほかから聞き取りしたほか、28日までに中央図書館台湾分館、中央研究院、世界最大と言われる老松小学校等を訪れ、聞き取りと文献資料調査を行う。

29日：前夜は台北駅前のホテルに泊まり、昼頃特急列車で台南着。黄振原氏の両親に迎えられ、黄氏夫妻を含めた六人から聞き取りをする。台南は「台湾の京都」と言われる古都で、「国姓爺合戦」で有名な鄭成功を祭った廟がある。台湾人を天皇の「忠良ナル臣民」にしようとした日本はここに、北白川宮を祀った台南神社を建てたが、鄭成功の人気絶大なのでこの廟も認めざるをえず、と言ってそのままではまずいと、鳥居を建てて「開山神社」と名を付けた。今はもちろん鳥居はなく、台南神社の跡地は体育館になっている。

30日：午前中にホテルで三人聞き取りをし、列車で北回歸線の標識のある町、嘉義に行き、近くにある呉鳳廟を見学する。ここは戦前修身の教材になった「山地族」(先住少数民族)の首狩りの風習を止めさせるために自分を犠牲にした呉鳳という伝説上の人物の祀る。聞き取りをした人がよく覚えている教材の一つで、「先生はどんな風に教えましたか」と聞くと異口同音に「身を殺して仁を成す」と返ってくる。今の呉鳳廟にも「舍生取義」という蒋介石の額が掲げてあり、これが「殺身成仁」に続く。いまだに「修身」の社会教育教材として利用されているのである。もっとも先住民族のなかには「我々はそんな野蛮な種族ではない」と言って反発する動きがあり、比較的最近のことと思われるが、廟の一部が放火されて焼け落ちているのを見た。この夜は聞き取りのため高雄で泊。直ぐ東の屏東は戦争末期に特攻隊の基地のあったところと聞く。

31日：朝列車で北上して台中まで戻る。迎えにきてくれた韓世卿氏の親族の方から聞き取りをし、夜はさらに政府教育局の役人の同窓生という今回では最高のエリート集団に出会って一応聞き取り調査の予定を全部終え、近くの草屯という町に泊まる。

4月1日：韓氏の車で近くにある台湾きっての観光地日月潭に案内してもらい、一日休養する予定だったが、直ぐ側に「九族文化村」という所があるのを知り、まずここに寄ってもらうことになった。出演していたブヌン（夫農）族の夫婦とピュマ（卑南）族の男性の話が面白かったことから、始め予定になかった「先住少数民族」の教育についても聞き取りをすることになり、さらにこれも全く予定になかった東海岸の台東のピュマ族の村を訪ねることを勧められる。時間がなくなったので日月潭は行かずに終わる。帰る途中草屯の韓さんが校長をしている小学校に寄り若干の資料を発見。韓さん宅で夕食をご馳走になり、衛星テレビで日本の高校野球を観る。台中ホテル泊。

2日：磯田・野村は台中の政府文献委員会（台湾総監督の蔵書がある）、駒込は台北での調査の補充と二手に分かれて資料調査。夜台北駅で落ち合って夜行列車で台東に行く。

3日：早朝花蓮で列車を乗り継いで、昼前台東到着。近郊の下栢榔村で20年来台湾に住み少数民族と交渉を持ってこられた日本人宣教師の松元セツ子さんを交え、三人のピュマ族の人から聞き取り。中でも80になるという老人は格別日本語がうまい。直ぐ近くのキリスト教会の長老だという。植民地時代は布教を禁じられていたのが、戦後日本語でキリスト教の伝動が行われたという。墓参の季節で列車が満席なので飛行機で夕方台北へ戻る。

4日：台北より中華航空便で午後羽田帰着。

この間聞き取りをした人は学者、研究者、政府の役人から商店主や農業、観光地のモデルを含む少数民族の人々まで延べ38人に上る。これは図らずも結果的そういうことになったというだけで、こちらの最初の計画は極めて大ざっぱで控え目なものであった。ところが実際に行ってみると、知人を通じて連絡を取った現地の台湾人の方々の並々ならぬ好意と協力とがあったお蔭で、次から次へと芋蔓式に調査対象が現れてきて、少しの無駄もなく十二分以上の成果を収めることができたのであった。この現地の協力にはいくら感謝してもしすぎることはないであろう。

一つ印象的だったのは台東で初めて「台湾語」を聞くことができたことであ

る（これは野村が確認した。正確には閩南語であろう）。⁴⁾台湾人が「台湾語」を喋るのは当たり前のようなのだが、今の台湾の標準語は北京語である。台東は台湾の僻地なので「台湾語」がいまだに生きていたのであろう。実はこの旅行中台東まで来て初めて、いかにも南国らしい明るい雰囲気に出会えることができた。かつては至る所で見られたというハイビスカスも、生け垣を作らなくなったためなのか西海岸では出会えなかったが、ここにはふんだんにあった。素朴な人なつこい南国の自然と人間が失われていない点で、ほんの一時の滞在であったが、東海岸は開発の進んだ西海岸とは対照的なように思われたのである。

3. 台湾の日本語教育の実態

台湾き旧植民地の中では一番日本語が通ずると言われる。日本の植民地では、「満州」を含めて、現地民族に日本語を強制的に学習させる政策を取ったことは事実であるが、それはなぜ台湾で最も「成功」したと言われるのか。それは単に植民地化されていた時期が一番長かったというだけのことなのか。日本語教育の内容や方法に独自のものがあったためなのか。現地の固有言語を一切用いないで教える「直接法」が「朝鮮」や台湾で採用されたと言われるが、その実態はどうだったのか。こういうことを確かめることが、今回の聞き取り調査の大きな目的の一つであった。

ある元・台湾公学校の日本人教師は「ダイレクト・メソッド」を取ったと、次のように証言している。

……（子どもたちは）全く日本語知らんでしょ。それに、ぶっつけ的に日本語を教えていくんですよ（中略）もう私は何もかも忘れてしまったけれどもね。そのころずいぶん、台湾と南洋群島というのがありましたね、委任統治の。あそこ朝鮮と満州、樺太そういうところと連絡しながらね。日本語をいかにして指導教育するか。そしてほんとうに日本人にするにはどうすりゃいいか。ということでそりゃもう非常に研究しよりましたよ。だけども私達の時代になってですね。いわゆる日本で英語教育をやるというような、ああいう教育ではだめなんだ、もっと直接法でやれ、と。ともかくむこうに行ってですね。台湾人

の子どもたちに国語を教えるまで、台湾語を知っとる先生は国語教育はできないんだと。そういうことを私達は言っておったですよ。それでむこうの人から大分いろいろ、お前内地から来て何生意気なこと言うか、台湾語知っててからこそ国語教育もだんだん出来るんじゃないか、台湾語がひとつもできで教壇にはじめて一年生相手にして立ってどうして動かすんだと、ということをやわれよったですよ。ところがあの直接法といいますかね。そのころ何とか言いつたですよ。あれはパーマーの…。(聞き手＝中内敏夫：ええ、パーマーですね。) ええ、植民地教育で英語をやり始めた。そのまあ、読めん原書を一所懸命勉強してですね。結局それじゃなきゃ本当の母国語といいますか、その学習はできないんだと。というようなことを勉強して、まあやってみよう。と。やった。それはどうしていいかわらんことでもありますけども、そういうそのダイレクト・メソッドっていいですかね、それでやっているとそれが一番早道なんです。ただしく国語の修得ができるんですね。母国語教育というのは言語学的に勉強していかなければだめだ、というようなことでやりはじめたんです。それで結局、何にも国語のわからぬ台湾人のとこへ行っても国語以外は使わないんです。これは鉛筆だという以外の言葉を我々は知らんわけじゃ。鉛筆だと台湾語で知るといって台湾語でこれは、と言うて、国語でこう言うんだとなる。こういうような間接法でやりよったらいつまでたっても、これは語学のあれはないんですね。それでもはじめっから、立ちなさい、すわんなさい、これは鉛筆です、これは何だ、とやるんですね。動作で問題いっしょにやる。そして子どもが聴いて、直接それは何だということのわかるようなふう。これはもう根気もあるし、大変なんですけど、そうですね、半年くらいたつてくるといっておもしろくなってくるんですね。⁵⁾

ところが東呉大学の蔡茂豊教授は、そんな直接法は果たしてどれだけ広まったか疑問だという。そして日本時代の日本語教育はせいぜい台北や高雄等の大都会でしか成功しておらず、失敗だったと断定される。師範学校附属などの何人かの教師が、その教授法を導入して研究したということは事実だが、それがどれほど広まったかははっきりしない。そう考えられる一つの根拠に、台湾人

の話す日本語のアクセントの問題がある。もしそうした教授法が実効をもっていたら、おかしなアクセントの日本語を平気で話すということはないのではないか、というのである。

実際に我々が行った聞き取り調査でも、都会地では始めから日本語だけで教えられたという証言が多かった。ところが、必ずしも一年生の始めから日本語ばかりで教えられたのではないことは、台中市近郊の草屯という町での調査で確かめられた。草屯は当時純農村であった。聞き取りをした人たちは、入学当初は台湾人の先生で、台湾語を交えながら教えてくれたと証言してくれた。我々の人脈はどうしても都市やエリート層に片寄りがちで、なかなか農村の調査はやりにくい、やはり農村ほ入らねば駄目だということを痛感させられた。当時の台湾は大部分が農村だったのだからなおさらのことである。⁶⁾

だが植民地時代の日本語教育が「失敗」した最大の原因は教授法にあるのではなく、実は教育における差別——台湾人と日本人とを別々に教育したことにあると蔡茂豊氏はいう。台湾人と日本人は初等教育では学制も違い、中等教育でも事実上学校を別けており、居住区域も全く違っていた。戦中末期で言えば台湾の総人口約660万人のうち日本人は40万足らずで、約6%にしかない。これをいっしょに教育すれば、小学校などでは台湾人の日本化どころか日本人のほうが台湾化されてしまうのは目に見えているから、日本人は小学校、台湾人は公学校と別けざるを得なかった。少数による多数支配の矛盾である。

蔡茂豊：戦後私が日本（の留学）から戻ってきたら、子どもたちは（国民政府の下で）みな北京語教育だ。私が母語の台湾語で話しても、北京語ではね返ってくる。……親父が台湾語で聞いても子どもたちはみんな北京語ではね返ってくる。彼ら（今の若者）にしてもそうだ。台湾語で聞いても北京語ではね返ってくる。癪にさわって《君、外省人（戦後大陸から台湾に移ってきた人たち）か》と言うと、《いや、台湾人です》と北京語ではね返ってくる。《台湾人なら、先生が台湾語で聞いたら、台湾語で返事しろ》と言うんだが、なかなかできない。そこで《ああ、（北京語を強制した）国民政府の教育は成功だ》と。どうやって成功したかと言うと、自分か中国人であるから中国語を使うのは当

たり前だという意識があるということだ。おもしろいですよ。彼らは自分が中国人であるから中国語話すのは当たり前だと思っている。(植民地時代の) 僕らの当時のクラスメートは、私は日本人だから日本語を話さなければならないという意識はなかった。日本人の先生が「皇民化運動」などを唱えても、実はうそっぱち。……教育というのはやっぱり台湾人を日本人にならせようという考えなら、いろいろな面で区別(差別)のないようにしなくては。国民政府、台湾人とずいぶん区別があったけれど、教育の面においては区別なんてなかった。外省人であろうが台湾人であろうが、成績(だけ)でくるんだから。

台湾人の日本語に対する意識を考えると、本省人(古くから居住している中国系の人たち)と外省人(戦後蒋介石の国民党政権とともに入ってきた人たち)との不幸な対立の歴史を無視できない。人口比からすれば前者が8割以上、後者は約15パーセントに過ぎないにもかかわらず、台湾人は戦後ようやく日本の支配から開放され主体的に国家を形成しようとしていた矢先に、ヘゲモニーを外省人(=国民党)に奪われてしまった。あくまで中国本土指向の国民党政府は台湾語ではなく北京語を公用語とした。これは長年日本語には通じていても北京語に馴染の薄かった台湾人に不利であったが、それでもはじめは一緒に国づくりに参加できることを期待して、自主的に北京語を学ぶ努力をしたという。

それではなぜ、今の台湾で植民地時代の教育を受けていない40代、50代の人たちが日本語が話せるのかと言うと、これはそれほどの思いで北京語を使い始めた台湾人に対して、国民党政府は「二・二八政治抗争事件」の血の弾圧(約1万8千人が殺されたという)とその後の恐怖政治を行ったことへの反発が大きく作用した。裏切られたという思いの深い台湾人は対抗上、北京語を使わないで、逆に日本語を日常に使い始めたという。蔡茂豊氏によれば「一種のコンプレイン(complain)」であり、皮肉なことにそれで日本語が普及したというのである。

もちろん戦後国民党は日本語を目の敵にした。日本語関係の文献や教科書など、片端から焼き捨てられてしまった時期があったという。⁷⁾ 戦時下の教科書類

がなかなか見つからないのも、一つにはそのためであろう。従って、台湾人(本省人)にとっては、日本語の常用は国民党に対する暗黙の抵抗の手段であったわけである。いまだに家族や仲間同志で、台湾語のほか日本語もよく使うという言語習慣の背後には、このような事情があった。つまり台湾で日本語がよく「保存」されているのは、植民地時代の「日本語教育」が成功したというよりも、むしろ戦後の状況の副産物と見られるのである。

さらに台湾人の民族意識を複雑にさせている一つの要因に「山地族」などとも呼ばれることもある先住少数民族の問題がある。人口比では0.2パーセントほどしかない台湾の少数民族は、現在では9族ないし10族に分類されているが、かれらの漢民族ではなく、南方系の人たちである。彼らの間では日本語が共通語として使用されているという。また日本に対して一般に好印象を持っている人が多いとも言われている。霧社事件等に代表される反日・抗日的な動きとこれはどのようにかわるのであろうか。これには本省人・外省人・山地族の関係をとらえつつ三者を同じ重みで研究して行く必要があるであろう。

4. 民族意識と言語意識——言語普及の教育外諸要因

今回の台湾調査で我々にとって大きな発見であったことは、異民族への言語の普及には、狭義の「教育」以外の様々な要因があるということである。例えば日本語が先住民族の共通語になっている(これはインドにおける英語の使用に相当する)というように、台湾内部における人種差別問題が先住少数民族への日本語の普及に関係していることである。また「二・二八」の大弾圧等の結果、内省人が外省人(=国民党)に対するレジスタンスの手段として日本語を意識的に使用するようになったというのもこれに当たる。日本語だけではなく「二・二八」事件の後では、大陸への反感から自分たち同志では「台湾語」を使うのがかなり増えたとも言われている。今でも先住民族の多い東海岸では「台湾語」を使っており、我々の乗ったタクシーの運転手はごく自然に知らない人とも「台湾語」で話していたのである。だが若い人は北京語の教育を学校で受けているので、(調査した1990年より)15年ぐらい前までは、市場などでは台湾語で話す人のほうが多かったようだが、「台湾語」を話す人の割合は大

人だったら2~3割になっているという。これは学校で使う言葉と家庭で使う言葉との比に相当するであろう。台湾はもともと多民族・多言語の社会であり、バイリンガルが寧ろ当たり前になっているのである。現に我々が宿泊させていただいた呉翰祺さん宅では、北京語と台湾語と両方使っているといっていた。まだ幼い娘さんも両方を巧みに使い分けていたのである。最近日本語以前より通じにくくなったとすれば、それは北京語の共通語化がようやく進行して、「台湾語」や日本語の役割がそれだけ低下してきたということも考えられる。

調査報告の時たまたま民族研究所で研究しておられた康宇哲氏（当時・韓国梨花女子大学教授・歴史学）がこの討議に参加されていたが、康氏が1961年に始めて台湾に行った頃は、学校では北京語を教え、商売人は広東語で話し、政府では南京語で話し、市場では台湾語で話していた、山奥（少数民族）は自分達の言葉だった。また当時10才際下で康氏より日本語の上手な台湾女性に出会ったという。解放当時10~11才に当たるから、戦後も家庭で親が教えるなどの形で日本語教育を受けていたということになる。⁸⁾

もっとも「台湾語」は日本語になじみやすいという特性はあるようである。野村章によれば、師範学校で「台湾語」という名で閩南語を習ったが、音声の点では「台湾語」のほうが片仮名で表現可能であり、中国語より日本語に近いという気がしたという。そのせいかな年配の人の日本語は、たどたどしくても発音はいいように感じられた。例えば「九族文化村」で会ったブヌン族の「ウマウ・八重子」さん（八重子という日本名は学校の先生がつけた通称で、類似の例は「南洋群島」の公学校にもあったという）の場合も、ポツリポツリではあるがすごく語りになっている。流暢さという点ではむしろ彼女のご主人のほうが「上手」といえば上手だったのだが。この点に関しては康氏からも、台湾人は言語的背景からして日本語になじみやすい。韓国人は日本で生まれても3世くらいにならないと、聞き分けは出来るが自然な日本語の発音にはならない。これは英語でも日本語的、韓国的、中国語的など種々の訛があるのと同じだとの指摘があった。

今や「南洋」などかつての植民地の人達のほうが「日本語らしい」日本語を話す例に良くぶつかる。日本語の共通語化ということと、母音や子音の日本語

らしい音声訓練が良く行き届いている。しかしこれは彼らに確立した民族言語のようなものがなかったためではないかとも考えられる。さらに親日的な態度を取るほうが、観光あるいは就職等の面で有利というような打算もあって、「親日的」ポーズを取ることもありうるのではなからうか。このように戦後になってから作られた面があるので、現時点を見ただけでと決めてかからないよう慎重な保留が必要である。

日本語の強制と関連して必ず取り上げられる「創氏改名」に相当する改姓名は台湾にもあったのだが、これには色々なパターンがあって朝鮮の場合のように単純ではないようである。またどの程度「強制」されたのかは十分に聞き出すことができなかった。隣組長のように立場上やらざるを得なかったということや、特別の配給が受けられるというように「エサ」で釣ったということはあるようである。また創氏改名の場合のようにワンセットではなく、名だけ変えて姓の方は変えなかったという例もある。いずれにせよ創氏改名しないと投獄された朝鮮のように一律ではなかったらしい。一方改姓名はしたがものの戸籍は変えずにおいたので、それがバレなければいいかと心配したという話も聞いた。旧姓と完全に無縁な日本姓に変えてしまうのは、台湾の場合にも当然ながら抵抗があり色々工夫をこらしている。林（リン）という人が読みだけ変えて「ハヤシ」としたが、誰もそう読んでくれないのでやむを得ず「中林」としたというような例もあった。

このように朝鮮の場合との状況の違いもあって、台湾人の対日感情はかなり複雑であり、単純に「親日的」などとは言えない。これは至る所で例が見られる。我々は台北と草屯で小学校（国民初級学校）を二校訪問したが、校内に掲示してある学校の沿革を見ると、戦前に創設された学校であれば「日攄時代」の沿革もそのまま引き継がれているのが印象的であった。これが韓国なら日本の植民地時代の沿革は完全に抹殺されているであろう。しかしそれは同時に爆撃、空襲、学童疎開などが、日本内地よりも早かったことを初めて知られることでもあった。また他方では日本の師範教育の問題点がそのまま今日にも引き継がれているとも聞かされた。

中でも一番心が痛むのは、戦時下の植民地支配が親子や友人間の分裂・対立

を引き起こす種になったということである。ある聞き取りでは、日中戦争の時に父親が中国が勝って欲しいと言ったところ、子どもたちが何でそんな事いうんだ、僕たちは日本が勝って欲しいと言ったという。親たちはどんな気持ちでこれを聞いたであろうか。

1946年に義務教育制度が台湾にも公布される（実際の実施状況は明らかでない）と同時に、徴兵制度がしかれた。もちろん当時日本は中国とも戦争を継続している。そこでもし台湾人が徴兵されて、中国戦線へ送られたらどうなるかという問題が当然起きたはずである。この問題にふれたとき、黄振原氏のお父さんは、「私だったら脱走しましたね。同じ中国人同士がなんで殺しあわにゃならんのですか。だから前線へ連れていかれたら脱走するつもりでした」とはっきり言われた。そばで聞いていた人がすかさず「だから連れて行かなんかったのよ」と口を出して大笑いになったのだが、我々はとてもいっしょに笑えなかった。しかし別の箇所で聞き取りをした人たちの中には、その時には別にそういうことを気にしていなかったと言った人もいる。ここにも中国人意識・漢民族意識・台湾人意識の三つが複雑に重なりあった「台湾人」の民族意識がみとれるように思われる。

日本の植民地支配に対する怨念のようなものは、表面的にはなかなか出てこないが、本当に突き詰めて行けばやはりどこかに現れてくる。それは一口に言えば、台湾人の民族意識ないしナショナル・アイデンティティがまだ弱かったのにつけこんで巧みに抑圧し、台湾人に民族としての主性の自覚をもたせないようにしたことに対してである。戦後台湾人が国民党の支配、つまり人口比にすれば15%に過ぎない外省人の支配に屈してしまったのも、「日換時代」に植えつけられた「奴隷根性」のためなのだ、それは日本が悪いのだということを知ったとき、初めて「本音」にふれたという思いがした。また「日本時代の教育の悪いところが戦後引き継がれている。日本による50年間の奴隷教育の後、国民党による40年間の愚民教育が始まった、その克服が今後の課題だ」という意見も聞いた。内在批判の形をとってはいるが、これは今回聞いたうちで最も痛烈な批判であろう。台湾の植民地教育問題はいまだに終わってはいないのである。

5. 国史教科書に見る台湾の日本語教育——「朝鮮」との違い⁹⁾

黄振原氏は台湾における日本語教育を、教科書『公学校国語読本』を中心に分析して、次のように言っている。

「日本統治下の台湾では日本語による「同化政策」を順調に進めることを目的として学校、社会、家庭の三方面から国語（日本語）普及が進められていた。その中で最も影響を与えたのは台湾人向け初等教育機関としての公学校における国語教育である。

当時の教育を受けた台湾人は今でも流暢に日本語を話せるし、日常生活における言動を見ても、日本語の習得と日本精神の育成とを並行しようとした公学校の影響が残っている。」そして、上記の国語教科書（特にその巻一）は、その構成上「外国人用」としての配慮はある程度あるが、「全体的にいえば、語法の学習と指導に系統性を欠いているし、しかも《口語敬体中心》という教育理念を要求しすぎたために、児童の言語表現に適さない文も出ているという問題点が顕著に見られるも」という。¹⁰⁾

植民地教育として共通しながら、その実施状況は朝鮮と台湾でかなり対照的に違っている面がある。日本領となった初期の台湾では植民地統治の基本方針として、急速な同化主義を避け、漸進主義がとられていた。台湾が植民地となったのが朝鮮よりも15年前であるのに、朝鮮教育令とほぼ類似の台湾教育令ができたのは、同化主義者である朝鮮憲兵隊司令官明石元二郎が台湾監督になった翌年の1919年で、逆に朝鮮より7年以上遅い。台湾に公学校が出来たのは1898年であったが、そこでは「本島人ノ子弟に徳教ヲ授ケ以テ国民タルノ性格ヲ養成シ同時ニ国語ニ精通セシムル」ことを目的としており、教育勅語は交付されていたものの、朝鮮のように「忠良ナル国民育成」を最初からうたっていない。また全体として、台湾の公学校は朝鮮よりも普及し、伝統的な教育機関である書房（私塾）はやがて衰退消滅し、朝鮮のように最後まで私塾と公教育の二重構造が続くようなことはなかった。

日本語（国語）教育の中核となったのは台湾でも朝鮮でも学校教育であるが、

何よりも大きな違いは、朝鮮は1936年の皇民化教育期に入るまでは、日本語が「国語」とされ他の教科の教科書も原則として全て日本語で書かれるようになったが、朝鮮語及び漢文という教科があり、徐々に時間を減らされながらも朝鮮語の教育が並行して行われていたし、朝鮮総督府による朝鮮語教科書も発行されていた。全教科を通じて日本語を教えることは強調されていたが、実際には朝鮮語も併用して授業が行われていた。それに対して台湾では漢文の時間はあったか「台湾語」（ないし中国語）の教育は行われていなかった。漢文は1937年に廃止されるまでは一応台湾語で行われていたらしいことは聞き取りによって確かめられたが、台湾総督府による台湾語の教科書は存在しない。

また日本語教育も台湾が会話に重点をおいているのに対して、「朝鮮」ではむしろ読みを重視していた。こうした事情について「朝鮮」慶尚南道視学の末永又一は次のように語っている。

台湾に於ては公学校児童の常住国語使用の指導奨励については総督府当局はもとより州郡当局も常にこれが奨励に努め、従って教育実務者は此の問題に就いては全精力を傾けて努力しあるの状況にある。「朝鮮の普通学校では対訳法で国語教授をやつてゐますが、台湾の公学校ではそんな不心得なものは一人もゐませぬ」とは朝鮮の普通学校の国語教授を視察したといふ申なるものゝ言であつた。「朝鮮の普通学校の児童は教室でも廊下でも運動場でもどこでも朝鮮語で会話をしてゐましたが、我が公学校の児童は学校内では絶対に台湾語を使ふ児童はゐません」とは朝鮮の普通学校の教育状態を視察したといふ乙なるものの言であつた。「私の学校では教師が見て居らうが居るまいが児童は絶対に台湾語を使つてゐません」とは各学校長の確信であつた。教室で学習してゐる児童を、廊下でさゝやいてゐる児童を、運動場で遊戯に余念なき児童を観る場合に、一年生も六年生も巧くこそあれ国語を使用してゐるのは視察者を驚かさせるものがあつた。教育実務者の努力を多とせざるべからざるものがあつた。事茲に至りしことは要するに教育者の国語教育に対する意気と、その意気より生れ出でし国語教育（会話指導）と国語使用の習慣化方案によるものと思ふ。¹¹⁾

実は「公学校教育の目的より考ふるも、公学校に於ては、当然国語常用の域まで到達せしむべきであるにもかかわらず、田舎の公学校は勿論市街地の学校でも、公然と台湾語を使用してゐる現状である」ことを原春一が論じたのは末永が台湾を訪ねる直前の1929年のことである。¹²⁾ 台湾の学校でも国語教育の質的転換の方策が模索されていたのである。その一方では学校で公然と台湾語を使用しうる唯一の場であったと思われる、漢文科（随意科目）がこの時期から急速に姿を消していく（このことは聞き取りでもほぼ確かめられた。正式廃止は1937年）。さらに台湾人の「生活空間を日本語で覆う」ためには公学校だけでは不足であると、1929年以来国語講習所（満12～25才の者に公学校教師がパートタイムで国語を教える社会教育施設）が発足していた。末永はまさにそうした転換期に訪台してその意気に感じたものであろうか。

だが末永は、「公学校に於ける国語教育」がそうした努力の「割合に児童の国語力の微弱なるを觀取することが出来るのである」という。そして「……一般的に論（つ）んずれば我が普通学校の児童の国語力の遙かによいものがあるやに思ふものである。……（台湾の国語教育は）会話教授の理論としては相当傾聴に値ひすべきものがあるがその実際は窮屈な形式規矩を与へるに過ぎざる状況にあると、国語教育の中心をなす読方教育が形式的素材吟味の程度を出でざる……公学校の国語教育では到底我が普通学校の国語教育とは同日に論じられないのである」と断ずるのである。¹³⁾

つまり台湾の国語（日本語）教育は実用は実用性や会話にこだわり、「読み」の力が劣っていると末永は言いたいのであろう。これはまた初等教育の就学率や日本語普及率とも関係があろう。この1936年の時点で、就学率は朝鮮では約25%。台湾では約44%であり、一方日本語普及率はそれぞれ6.9%、32.3%であった。¹⁴⁾ つまり日本語の読み書き能力は朝鮮の子どものほうが上だったかもしれないが、そもそも日本の支配する学校教育を受ける子どもは一部の層に限られ、大衆的な日本語能力（会話力）は台湾のほうがはるかに進んでいたということである。

台湾の公学校における実学重視・日本語教育における会話重視の方針は、皇民化教育の中核となる国史や地理の教育においても、朝鮮との違いがかなり明

確に現れている。台湾の公学校は朝鮮の普通学校と異なりその初期から6年制を基本としていたが、歴史を教科目に含んでいなかった。学校制度に違いがあるが、それを学習する学年段階（5・6学年）で考えれば、朝鮮では併合直後から一応日本歴史があったのに対し、台湾では長い間それをおこななかった。公学校に日本歴史や地理が導入されたのは、1922年の台湾教育令改訂においてである。

実例として朝鮮と台湾で用いられた最初の国史教科書、①朝鮮総督府編纂『普通学校国史下巻』（1924年翻刻発行・1927年改訂翻刻発行）と、②台湾総督府編纂『公学校用日本歴史下巻』（1923年第1版発行・1926年第5版発行、後「国史」に名称変更）のうち、同じ時代を扱った箇所を比較してみよう（原文は縦書、ルビは省略、漢字は当用漢字に改めた）。

① 四 明治二十七八年戦没

さきに征韓の論うやみてより、我が国はつとめて朝鮮と交を修め、公使館を京城に設け、後護衛の兵を置けり。然るに朝鮮には党派の争ありて、明治十七年、清国にたよらんとするものは、京城にとゞまれる清国兵の力をかりて、我が国にたよらんとするものを破り、遂に我が公使館を焼き、多くの官民を殺傷せり。されば我が政府は、朝鮮をして償金を出して其の罪を謝せしめ、更に伊藤博文を清国に遣はし、其の使臣李鴻章と天津に会して、両国とも朝鮮に兵をとゞむることをやめ、若し必要あらば、互に通知したる後に出兵すべしと約せしめたり。之を天津条約といふ。（『普通学校国史下巻』127～128頁）

② 四 明治二十七八年戦没

朝鮮には独立党といつて、我が国に好意をもつてゐるものと、事大党といつて、清国にたよらうとするものと、二つの党派がありました。此の両党はいつも精力を争つてゐましたが、明治十七年に、事大党は京城に駐在してゐる清国兵の力を借り、我が公使館を焼いて、居留官民を殺傷しました。そこで我が国は朝鮮に談判して、償金をださせて謝罪させ、又伊藤博文を清国につかはして、李鴻章と天津で談判させました。さうして今後は両国とも朝鮮に兵を置くこと

をやめ、若し兵を朝鮮に出す必要がある時は、先ず互に通知しあふといふことを約束しました。之を天津条約といひます。(『公学校用日本歴史下巻』93～94頁)

ここに見るように、朝鮮の『普通学校国史』は内地の『尋常小学国史』の内容に、朝鮮史を断片的に挿入したもので、教科書の文体は内地そのままの旧かな遣い・文語体になっている(したがって朝鮮の国史教科書は朝鮮史の分だけ内地や台湾の教科書よりページ数が増えている)。日本人児童にも難解であった文章を朝鮮人児童に理解させるのは容易ではなかったと思われる。¹⁵⁾ あたかも歴史など学びにくいほうがよいのだ、知らなくてもよいのだと言わぬばかりである。

ところが台湾の公学校の「日本歴史」(後に「国史」教科書は、基本的な内容は挿し絵や地図などを含めて内地の国定教科書や朝鮮の国史教科書とほとんど全く同じであるのに、教科書の文体が大きく違っているのが目につく。台湾の国史や地理の教科書は、最初から平易な敬体口語を採用しているのである。これは上に示したように、こうした教科を学ぶ土台となる日本語(国語)教育のあり方の違いがその理由であると考えられる。

初等教科書の文体の口語化・敬体化は教科書近代化の一端でもあったから、台湾の教科書は日本の国史教科書の敬体口語化のトップをきることとなった。実際内地の国史や地理・理科などの国定教科書が文語体から常体口語に変わるのは昭和十年代に入ってからである。そして1943年発行の『初等科国史』『初等科地理』に至ってようやく敬体口語が採用されるのである。朝鮮の国史や地理の教科書が常体口語をさいようするのは1932年の『初等国史』、次いで敬体口語を採用するのはそれぞれ1983年の『国史地理』からであるが、それでも内地よりは数年早い。教科書文体口語化の点でも植民地の教科書は一種の先行的実験となったのである。

ところがこの台湾の現地民学校(公学校)の歴史教科書には、朝鮮の場合と違って、台湾固有の歴史的記述がほとんどないのである。これはその後の改訂においても基本的にはあまり変わらない。内地の教科書と同じく、台湾が日

本に侵略されて植民地となる過程を除けば、歴史の舞台にほとんど台湾は登場しないのである。朝鮮の教科書の場合には、日本との関わりにおいて朝鮮の名が出てくるだけでなく、一時期は朝鮮固有の歴史的事項を、部分的ながら挿入することもなされていたが、台湾ではそういうことはこの段階では行われていない。台湾の子どもたちは、まったく民族的な要素を感ずることなく、最初からきわめてソフトに皇国史観に引き込まれるように計られていたということになる。

前述したように、これらの教科書の下敷きになったのは文部省の『尋常小学国史』（1920年）である（それまで「日本歴史」とっていたのが、この教科書以後「国史」と呼ぶようになった。しかし、台湾ではしばらく「日本歴史」の名が継続する）。したがってこの「明治二十七八年戦役」の項については日本の内地の子どもたちも全く同じ内容を習ったわけである。日本歴史導入以後最初期（大正末～昭和初期）に発行された教科書を比較してみると、「朝鮮」と台湾ではこのように大きな違いが見られるのである。

6. まとめ——統治の「成功」と異文化教育の問題

結論的に言えば、今回の聞き取りによって植民地時代の台湾では、都会のみならず例えば草屯のような田舎でも、公学校を卒業する頃はどんな人でも日本語を話せるようになっていたということが一応確かめられた。

同様な証言は「満洲国」の朝鮮族の調査でも得られている。

「当時言葉きみんな使えますね。同じ同級生、言葉はみんなできますね。算数とか理科とか成績の差はありますけれど、（話し）言葉としてはみんなこなれた日本語ができたんですよ」¹⁶⁾

この場合にも実際には日本語一辺倒の教育がされていたという点では条件はほぼ対等であろうと思われる。これらの証言によれば話し言葉を習得する限りでは落ちこぼれは出にくい。落ちこぼれが出るのは書き言葉ないし記号的思考の習得においてであるということになる。これに対して一応バイリンガルであった漢民族系中国人の日本語習得には多くの困難が訴えられている。その点で基本的に会話を「国語」教育の主体とした台湾の植民地教育は一応「成功」で

あったと言えるかもしれないが、それは学校教育における母語と排除を前提としたものであった。もちろん学校卒業後の語学能力の保持は、既に見たようにさまざまな条件が加わる複雑な問題である。

しかし単に言語能力としての日本語教育だけを問題にすることができないことは言うまでもない。それが台湾人のアイデンティティの形成とどのように関わったかが問題である。確かなことは日本は台湾の植民地化に成功したというよりも、台湾人の本国（中国本土）に対する反感をうまく利用して、日本に対する反感を減らすことに成功したのとも言えよう。だから（少なくとも朝鮮よりは）植民地統治も日本語教育もうまく行ったのである。台湾のナショナル・アイデンティティを語るのは難しい、というよりそもそもそれをあの時代に想定するのは若干無理があるかも知れない。日本の植民地権力は、台湾では朝鮮のようにナショナル・アイデンティティを踏みにじるというのではなく、元々それが育ちにくいところだったからこそそういうものが育たないようにしたのであり、そのためにうまく民衆の反抗を押さえ込むことができたのである。それがある証言者によって「奴隷根性の植えつけになった」と言われたことの本質であろう。むしろ日本の差別に対する意識は当時から強かったが、それが統一した民族感情の形成に至るには、当時はいまだかなり大きな隔たりがあったということであろう。

伊藤幹彦によれば、台湾における抗日運動が、非合法的武力抵抗運動から合法的政治抵抗運動に転換して以来、台湾文化協会の指導者としてその中心人物となった林獻堂は、台湾人意識や漢民族意識はあったが、中国人意識はなかったという。彼が守ろうとしたのは中国文化ではなく、台湾人によって改変された漢民族文化、すなわち台湾文化だというのである。¹⁷⁾ 最近日本語が通じにくくなったとすれば、それはさまざまな紆余曲折を経て、「台湾人によって改変？された」北京語が、共通語としての「台湾語」としての権威をようやく確立してきているためなのかもしれない。もしそうだとすればそれは台湾のアイデンティティ確立のためには慶賀すべきことであるとも言えよう。

[注]

(1) 例えば矢内原忠雄は、一方で総督府の専制政治は容赦なく批判しながらも、「我台湾統治三十年、その治績は植民地経営の成功せる稀有模範として推賞せらる」と言い、その理由として悪疫や悪習（阿片）の流行の絶滅、「土匪」や「蕃人」の反乱の鎮定、産業と教育の振興を挙げている（矢内原忠雄『帝国主義下の台湾』、1929年、『矢内原忠雄全集』第二巻、387頁）。また教育については、伊藤潔が「確かに、後藤新平が懸念したように教育の充実は台湾人の民族意識を高め、植民地支配への抵抗運動を助長した。しかし、日本の台湾統治の《遺産》はインフラ整備におけるソフト面としての教育であり、これなくしては台湾人の近代的な市民としての目覚めは、大幅に遅れたであろう。また、植民地統治下の台湾では、日本人官吏や警察官と比べて、概して教師は使命感が強く人格的にも優れ、敬愛と信頼を集めていた」と言っている（伊藤潔『台湾——四百年の歴史と展望』、中公新書、1993年、117頁）。

(2) Patricia Tsurumi, "Japanese Colonial Education in Taiwan, 1895-1945", Harvard University Press, 1977. この研究は朝鮮と台湾の植民地教育の比較に関する興味深い視点からの論究を豊富に含んでいるので、以下にその要点を紹介しておく（なお、筆者が必ずしもこの見解に全面的に賛同しているわけではないことを、予め附言しておく）。

朝鮮民族の強力な反日的反応は教育以外の要因を無視できない、とTsurumiは言う。台湾人の祖先は大陸で生活できなくて渡ってきたものである。台湾が日本のものとなる時2年間の猶予付きで台湾人に日本人になるか中国大陸に帰るかの選択の余地を与えた。政府の高官や上流階級はほとんど本土に帰った。朝鮮人には上下官民を問わず外に行く先はない。王朝もその俣ソウルに留まっているのである。

一方朝鮮は誇り高き王朝の伝統と古代文化とをもった一国全体が併合されてしまった。「京城」は李王朝の首都ソウルそのものが強奪されたのである。北京から遠く離れた僻地「台北」とは比較にならない。

中国でも台湾でも家系がそんなに決定的な要因となることはない。清王朝も外から来たのだし、権力の中枢が日本に移ってもそんなに衝撃的ではない。台湾では富裕な階層は多く商人であって日本との関係は利益があった。

これに対し李王朝の朝鮮では生まれが決定的であって、両班階級が政府の中枢を占めていた。だから日本は朝鮮では有識階級の全体を敵に回したことになる。さらに朝鮮では日本の来る前に宣教師達によってもう一つの近代化のモデルをすでに知っていた。日本に頼らなければ近代化出来ないわけではなく、そこには選択の可能性もあった。地理的にも朝鮮は台湾の6倍広く、交通通信の状況も遅れていたから全体が僻地のようなものであった。日本の統治権を確立し学校を全土に普及するのは台湾より遥かに困難であった。

従って抽象的には同一の政策が両者では全く違ったものになったのである。

日本は中国文化を尊敬していたが、朝鮮文化は軽蔑していた。このことは朝鮮人によくわかったとそれを恨んでいた。朝鮮王朝の取り扱い方も侮辱的で陰謀的に見えた。台湾では日本の統治が農民の生活を悪化させたことはない。ところが朝鮮ではほとんどの農民が土地の登録と、金納制によって莫大な被害を受けたるしかも永年所有してきた土地を農民が失うにつれ日本からの移住農民——台湾より多い——がますます多くの土地を持つようになった。富裕な地主になった農民も一部あるのだが、それより日本人の地主のほうが目に付くし、目の敵にされるのは当然である。

農業政策も工業政策も朝鮮よりは台湾のほうに多くの利益をもたらした。朝鮮米は台湾米より日本で需要が多く、米の需要が減り始めた1929年でも、台湾人は朝鮮人の2倍の米を食べていた。1937年台湾では36.3%が電気を引いていたが、朝鮮では11.9%に過ぎなかった。ところが同年の水力発電量は朝鮮は台湾のほとんど3倍だった。就職や賃金の差別も朝鮮のほうがひどかった。

また台湾の場合は中国に戻ることもできたため、日本の統治は激しい愛国主義者の抵抗に逢うことがなく、概ね平和と安定をもたらした。富裕になったのは一部のものだったが、ほとんどのものをより健康にした。差別に気付いてからも、パイの分け前をもっと大きくすることを求めたのであって、パイそのものを否定したのではなかった。日本の教育を受けることがパイの分け前を大きくする道であることは明らかだった（特に医者の場合）。差別は憤っても特に日本の高等教育を受けた台湾人は日本に引き付けられるようになった。

こうしたもろもろの条件が「日本化」教育を逆効果にさせたのである。「類似の植民地教育政策は必ずしも類似の結果をもたらさない。台湾人の日本教育に対する反応はどう見ても朝鮮人よりずっと肯定的であることはたしかである」。これがTsurumiの結論である。

- (3) その後日本大学教授佐藤秀夫氏を代表とする「日本語教育史研究会」が、文部省科学研究費による総合研究(A)として、内外の植民地・占領地の日本語教育用教科書(国語ないし日本語以外の各教科用教科書、日本人用の補充読本、日本側及び傀儡政権の編纂した現地語教科書と自習書・辞書類を含む)約3000点の所在を確認し、『第二次大戦前・戦時期の日本語教育関係文献目録』(1993年3月)を完成した。これには筆者も参加している。
- (4) 野村章「台湾と民族のこと」、『アジア文化』第17号、1992年。野村は戦時下台北師範学校で週1回「台湾語」の授業を受けている。漢民族系の「本島人」(台湾人)にも閩南語系の人々と客家語系の人々があることは知っていたが、なぜ閩南語が「台湾語」とされたのかについては、「その理由を考えようとしたこともなかった」という。
- (5) 『民間教育史料研究』No.15、1977年。鍾清漢『日本植民地下における台湾教育』(1993年)によれば、1913年の国語教科書改訂を機に、「日本語教授法に台湾語の使用を絶対禁止した」という(同書262頁)。
- (6) 天理大学助教授前田均氏は1918年～20年に下営郷下営公学校教師を勤めた台湾人顔水龍氏に同じことを確認している。聞き取りの最初のほ

うでは「日本語だけ。教えるのも日本語だけ」と言っていたが、後に次のように答えている（前田均「日本統治下台湾の教師たち」、『南方文化』第20輯、1993年1月）。

周（月坡＝顔氏の知人）：先生が公学校の先生してたとき、1年生、台湾の学生にどうやって言葉教えるんですか。

顔：うん、やっぱり、まぜる。

周：台湾語とまぜて。

顔：たとえば、ハナ（花）、ホエ。一方、日本語、一方、台湾語とくっつけて教えるんだ。

周：あのころ、台湾の人、ほとんど日本語言えませんでしたよ。

顔：言えませんよ。やっぱり田舎だからね。わかりません。

- (7) 蔡茂豊氏によれば、日本の敗戦後1947年までの2年間は過渡期で、日本語・台湾語・北京語が重畳して用いられており、1946年12月25日に禁令がでるまでは作家も日本語で創作活動ができた。しかしそれから日本語教育の暗黒時代で、以後1946年まで大学で日本語学科を設置することも認可されなかったという。（蔡茂豊「台湾における日本語教育50年史覚書」、1994年7月3日、天理台湾研究会での報告）
- (8) 前田均氏は少数民族のアミ族出身の李基明氏（戦後の中国名で、日本時代はアミ語の名前から改姓名した「坂田基明」。1900年生まれ）が、戦前・戦後を通じて花蓮県の公学校・小学校の教師をしていたが、1962年退職後カトリック教会の伝道師をしながら、地域の子どもたちに「日本語は大切だから」と言って、暇を見て無料奉仕の塾のようところで日本語を教えていたことを同氏の子息から聞き取りされている。（前田均、前掲論文）。
- (9) 本節の記述は、拙論「皇民化教育と植民地の国史教科書」、『講座・近代日本と植民地』4、岩波書店、1993年の「二の1 朝鮮と台湾教科書の違い」を訂補する意味もある。
- (10) 黄振原『戦前台湾国語（日本語）読本の研究——「公学校用国語読本第一種」を中心に——』、私家版、1993年、「論文要旨」より。さらに

黄氏が『アジア文化研究』創刊号（国際アジア文化学会、1994年6月）に掲載した同じ題の論文では、「《自己伝達》ということだけではなく、《他者理解》ということも、コミュニケーション能力を重視した外国語教育の主な目標である点から考えると、同時の国語読本は、話し方といくら連絡しても、敬体中心のせいで、どこかに若干不足が出ているはずである。また「誤報を体系的に進めていかなかった結果、用言の学習がかたよっており、体言・動詞以外の言葉による表現力が薄弱な基礎の上に、中学年に進むと、教材には他の活用形の使用が増えてくるし、語彙（言語）の分量、構造の複雑な文も多くなるにともない、文意の理解が困難になり、児童に読方のできないきらいがある」と批判している。

- (11) 末永又一『朝鮮から見た台湾の教育』、1931年、114～115頁。
- (12) 原春一（公学校に於ける国語使用）、『台湾教育』三三一号、1929年5月。
- (13) 末永、前掲書、117～118頁。
- (14) 統計は『台湾の社会教育』昭和十七年版（1942年）および朝鮮総督府が1944年第八五帝国議会に提出した説明資料（小沢有作「朝鮮における日本植民地教育の歴史」、旗田巍監修『日本は朝鮮で何を教えたか』、あゆみ出版、1987年、92頁からの再引用）。
- (15) 旗田巍「朝鮮人児童に対する朝鮮総督府の歴史教育」、前掲『日本は朝鮮で何を教えたか』、49頁。
- (16) 『成城学園教育研究所研究年報・第十七集』、106頁。
- (17) 伊藤幹彦「台湾抗日運動史の研究——林献堂の政治思想を中心に——」、前掲『アジア文化研究』創刊号。